

氏名	勝岡 ゆかり
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第218号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉人形浄瑠璃の意義と役割－人間形成の見地から
総合審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 佐野 靖
（副査）	〃 准教授（ 〃 ） 山下 薫子
	〃 教授（ 〃 ） 塚原 康子
	〃 〃（ 〃 ） 杉本 和寛

（論文内容の要旨）

本研究は、人形浄瑠璃の意義と役割を人間形成という見地から明らかにしようとしたものである。

江戸末期から明治初期にかけての鳥取県、愛媛県、福岡県には「若者の善導」を目指して人形浄瑠璃が取り入れられたという伝承がある。今日もそれらの地域では、人形浄瑠璃について「人の和と人の道を伝える」、「道德教育」などの意義が認識されている。こうした例から、他の地域で人形浄瑠璃が普及していった歴史の過程でも、同様の人間形成的な意義や役割を担ってきた可能性を指摘した。

次に、娯楽の中に楽しみながら、「義」——人としての正しい道を完うすることを目指していた浄瑠璃作者の作品認識と、楽しみながら義を知るという受容者の作品認識は、重なると指摘した。こうした一致から『浄瑠璃雑誌』に記されている愛好者の様々な意見は、実際の作品への認識に立脚した、極めて具体的・現実なものとして指摘した。

次に、戦前にあった、浄瑠璃は時代にそぐわないという意見、今だからこそ浄瑠璃が必要という両方の意見を概観する中で、時代を超えた普遍的な価値としての「義理人情」や「人としての正しい道」の意義が認識されていたことが判った。また、組織的・通信的教授の必要性、内容理解重視の教育が提唱され、レコードによる独学が推奨されていた。専門教育、専門学校その他、小学校や中学校、女学校の教育への人形浄瑠璃の導入も検討されており、今日に通じる様々な認識が、既に戦前から論じられていたことが判った。

地方の人形浄瑠璃保存団体により全国で上演されている外題は全部で98種類あり、その中には時代物作品も多い。問題点は後継者不足、高齢化、資金不足などであり、課題は公演可能な劇場の設営、定期公演の実施、人材育成、行政との連携などである。教育行政への期待としては、人形浄瑠璃の小中高のカリキュラムへの導入、体験教室の実施、社会に周知して理解や関心を広めること、経済的援助、行政的バックアップなどが挙げられていた。

全国で人形浄瑠璃の教育に取り組んできた学校は少なくとも43校あり、全国的に分布している。小学校がやや多く、数十年の歴史を持つ学校も少なくない。クラブ・部活動で取り組んできた学校が多かった。取り組まれている外題の総数は25種類で、「傾城阿波鳴門」「三番叟」に取り組んでいる学校が圧倒的に多いと判った。

子供が浄瑠璃にふれることの意義として、積極性の涵養、年配者との交流から悲しみや痛みを乗り越える力を与えられ、自らの人生に対して励ましを与えられる、などの点が認識されていた。また、「忠や義、親孝行、貞愛など人の道を学ぶ」、「情や愛など人間の普遍性にふれる」、「後継者育成」、「文化への理解が深まる」「自尊感情が高まる」、「豊かな情景描写・感情表現ができるようになる」、「心の幅が広が

る」、「心が安定する」、「自己表現ができる」など、その意義は非常に多角的に認識されていた。

教育現場の子供たちの認識を調査したアンケートから、浄瑠璃は今日においても十分に学校教育の教材として可能性を有するものであることが、判明した。また、人間の複雑な心理やそれを描いた物語、音楽を理解できる年齢に達した子供たちの潜在的な能力を引き出すために、時代物の題材としての可能性を重視すべきと指摘した。

人形浄瑠璃の魅力については、「登場人物から生き方や人のあり方を学べる」という選択肢を、殆ど全ての学校の子供たちが選んでいた。教育現場で指導者は、浄瑠璃の芸としての素晴らしさを伝えていくことを重視し、往々にして「作品からの生き方の学び」については殆ど意識していない。このように、指導者が意識していないにも関わらず、「知らず知らず」の裡に「登場人物から生き方や人のあり方」を学んでいる子供たちの認識は、戦前の「知らず知らずのうちに義を学ぶ」（義=人としての正しい生き方）の認識と、正に通じている。すなわち、戦後の学校における人形浄瑠璃の教育も、単なる知識技術の教授のみならず、潜在的に「生き方」という徳育面での影響を及ぼしていたと言える。

近代以降の知育を中心とした西洋の学問体系の中では、教育基本法第一条「教育の目的」として、「人格の完成」が掲げられているにも関わらず、ともすると徳育が欠けてしまいやすいと指摘されてきた。こうした時代にあって、伝統的な徳育としての意義を有し、実際に情操教育としての役割を發揮してきたのが浄瑠璃であった。このことは、「教育基本法」の目的にも適い、今日的要請にも適う。「人格の完成」という理念の実現のために、音楽教育は何ができるのか。自尊感情を高め、心が安定したり、豊かな自己表現ができるようになる、更に「人としての正しい道」「義」の生き方に学ぶ、などの点から豊かな人間形成に繋がる、人形浄瑠璃の現代的意義と可能性は、極めて大きいものとする。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、人形浄瑠璃の意義と役割を「人間形成」という見地から明らかにするために、文献史料に基づく歴史研究（第1・2章）とフィールドワークや聞き取り調査、アンケート調査といった調査研究（第3・4章）を行い、人間形成上の大きな意義と役割をもつ人形浄瑠璃が、学校教育の教材として大きな可能性をもっているという結論を導き出したものである。

まず、本研究は、これまで音楽教育学の分野で手薄であった語り物音楽の教育的価値に焦点を絞り、受容史の観点を中心とした歴史研究、ならびに調査研究を通して、その意義を明らかにしたという点で価値をもっている。また、とりわけ全国各地での調査研究において、指導者や教員、さらには学習者を対象に丁寧な聞き取り調査を実施し、実証的なデータを蓄積することができた。こうした基礎的なデータは、本研究の結論を根拠付けるものであると同時に、今後学校教育において浄瑠璃をどう扱うのかを問い直していく上できわめて貴重な資料となり得るものである。

しかしながら、いくつかの課題も明らかとなった。浄瑠璃の教育的価値を情操的な面に特化し過ぎた結果、芸術的な側面や学習者の発達の側面などに深く言及できなかった点は残念である。学習者である子供から、音楽的な側面や「難しいから挑戦したい」といったコメントを引き出せているにもかかわらず、それらが十分に浄瑠璃の教育的価値に結び付けられていない。また、方法論の関連付けが不十分であり、文献史料の分析、解釈に甘さが残ることも確かである。

以上、本研究のもつ音楽教育学的な意義や価値、あるいは課題等を総合的に判断して、課程博士の学位論文に十分に値する内容と評価し、合格とする。